

事例 7

支援のアイデアが集まる「発達障害学習会」(地域)

～事例研究会を通して支援のヒントをつかむ～

クラスにいる子どもへの支援について悩んでいたイチカワ先生は、同校のSRECの勧めで、地域で行われている「発達障害学習会」に研修を兼ねて参加しました。

そこで、自分の事例を報告して、参加者から多くのアイデアやアドバイスを受け、それらを参考にしながら、校内でも支援について話し合いをもち、日々の実践に取り組んでいます。この事例では、地域で取り組まれている学習会について紹介します。



学級担任 (イチカワ先生)

ツトムさんのことで悩んでいるのですが、どこかに相談できないかしら？障害について、専門的なことも勉強したいし・・・

校長先生、教頭先生に相談して、学習会に参加してみます。

A養護学校で行っている「発達障害学習会」に行ってみたらどうだろう。

ツトムさんのことを事例として扱ってまいりましょう。



SREC

学習会に参加

校内委員会実施

「個別の指導計画」作成

実践

地域における「発達障害学習会」

専門家を囲んでの学習会を、地域で開きたいという強い要望が以前からあり、支援センター職員、教員、保護者等で準備を進め、下記のように開催することになりました。

- 1 日時 毎月1回 18:30～20:30
- 2 場所 A養護学校 会議室
- 3 参加者 自由
- 4 内容

- (1) 参加者全員でテキストの読み合わせ (必要に応じて講師の先生の説明)
- (2) 事例研究会 (インシデントプロセス法により)

※保護者、福祉関係者、医療関係者、教育関係者等、毎回 20名前後の参加者で実施しています。



●事例研究会での内容

<イチカワ先生の事例発表>



ADHDと診断された小学1年生の男の子。カブトムシが大好きで、自慢したくて、他のことがなかなかできないようです。

自分に何かされるとオーバーにとらえて泣き叫び、周りの子のことが理解できないようです。

レポートがとれなかったり、彼にかかると他の子への支援がほとんどできなかったりで、悩んでいます。

<提案された意見>

家の人との連携を大切にしましょう。参観していただいたり、医療相談を受けたりすることも必要かもしれませんね。



一人で抱え込むのはたいへんです。TT等支援体制を学校で検討してもらいましょう。

クラスみんなで、カブトムシを飼うようにしたらどうだろう。

●イチカワ先生の取り組み

校内委員会では事例研究会の時に提出されたアイデアをいかし、次のような方向になりました。

- ・カブトムシをクラスで飼うことについては、提案者がカブトムシを提供するという申し出もあり、是非実施してみよう。
- ・保護者とは、連絡帳等でできるだけ情報交換をし、頑張ったことやできたことなどを具体的に伝えていきましょう。信頼関係ができれば、医療相談も含めて懇談をしていきましょう。
- ・体を動かす活動や外に出る活動を取り入れ、なるべく空白の時間をつくらないようにしましょう。
- ・学年での活動を行うなどして、学年で協力体制をつくりましょう。
- ・他の子とツトムさんをつなげる役を教師が行い、ツトムさんの言いたいことを他の子が説明するような場面もつくっていきましょう。

●ツトムさんとクラスの変化

- カブトムシをクラス全員で飼うようにしたので、他クラスの子たちの出入りも多くなり、クラスとしても広がりが出てきました。
- ツトムさんは、仲間ができる喜びを味わいました。
- ツトムさん自身も仲間を増やしていこうと願いをもち、友だちと一緒に少しずつ活動できるようになってきました。

一人で悩んでいたけどオープンにしてよかった。よい機会になりました！



事例から学ぶ

学習会はいろいろな立場の人と出会う機会にもなり、いろいろなアイデアがもらえ、支援の幅が広がります。困った時には一人で悩まず、学習会などに参加して相談することも効果的です。

各地域で、様々な学習会が実施されているようです。まずは、SRECに問い合わせてみましょう。

事例 8

みどころ

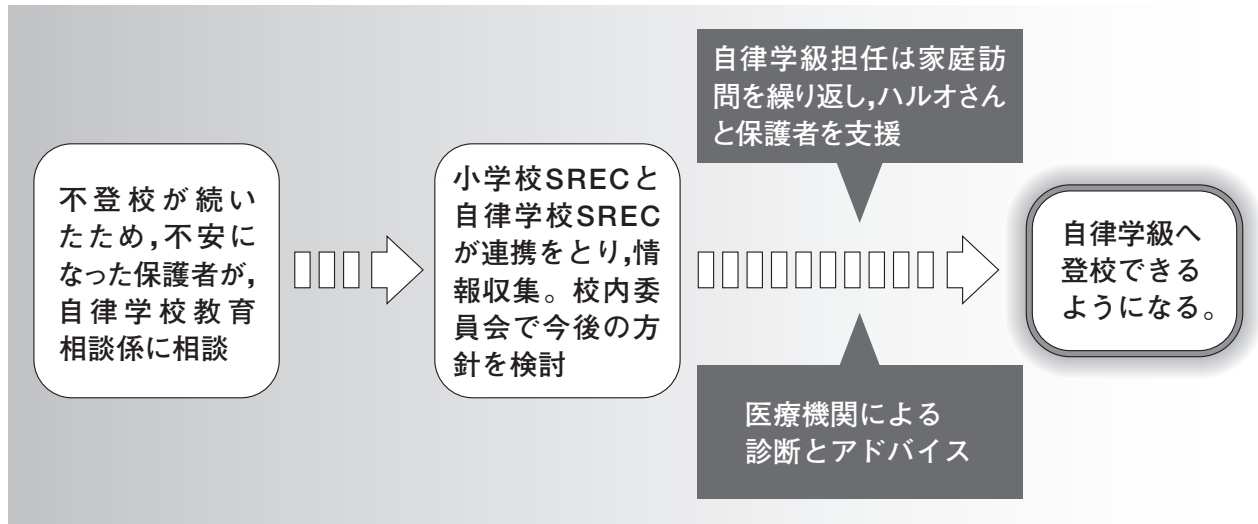


共に進める子ども理解(小学校)

～ネットワークづくりと特性を生かした支援～

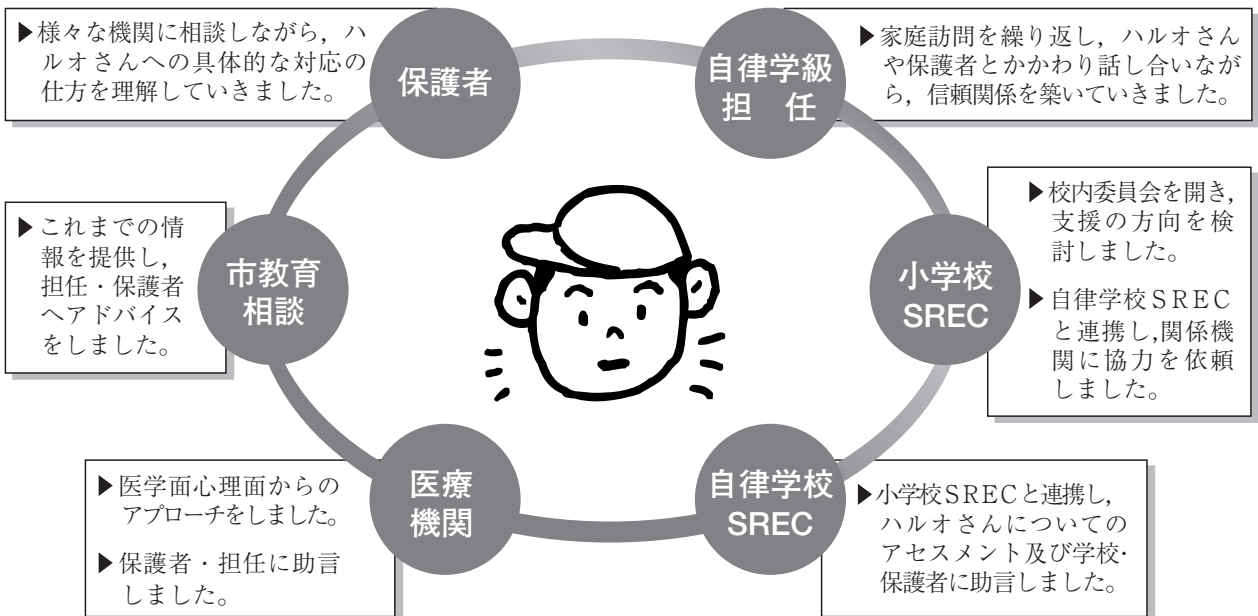
学校では話すことが苦手で不登校だったハルオさん。2年生からは自律学級に入級しましたが不登校は続き、保護者は不安を抱えていました。また、家庭では乱暴な行動も生じ始め、子どもの理解や対応に苦しんでもいました。学校と関係機関とが連携をとり、保護者の心情に寄り添ったアプローチをする中で、子ども理解を共に深めていき、登校へと結びついた事例を紹介します。

●ハルオさんが登校できるまでの流れ



●自律学校SRECと小学校SRECとの連携(支援のネットワークづくり)

自律学校と小学校のSRECは互いに連絡を取り合い、今後の方向について話し合いました。これまでハルオさんにかかわってきた市の教育相談、医療機関からも情報を得ることができ、ハルオさんと家族を支えるネットワークが徐々につくられていきました。自律学校と共に支援を進めたことで、ハルオさんに対する支援の幅が広がりました。



●保護者と学校関係者によるハルオさんの理解

ハルオさんの不登校の原因は何だろう、自律学級担任と小学校SRECはいつもこの疑問を抱えていました。また保護者もハルオさんの様子を記録したり、様々な機関へ相談に出かけたりして、ハルオさんの課題を探り続けていました。しかし、十分な支援の方向が見つけれないでいました。

その悩みを解決する糸口になったのは、医療機関の診断とアドバイスでした。ハルオさんの特性が明らかになることで支援の方向も定まり、瞬く間に学校と家庭との連携が深まって、同一歩調での支援が始まったのです。

●自律学級担任によるハルオさんの特性を生かした支援

自律学級担任はハルオさんが不登校になった当初から家庭訪問を繰り返し、再登校へのルールを敷いておきました。担任との信頼関係ができてくると、ハルオさんにも「学校へ行きたい。また給食を食べたい」という気持ちが出てきました。担任は再登校を始めたハルオさんのために特性に応じたさまざまな支援の手だてを用意しました。特に会話によるコミュニケーションが困難なハルオさんが安心感をもって担任とコミュニケーションをとれるよう様々な配慮をしました。



担任の願い

再登校したとき、安心して教室で過ごせるようにしたい。
視覚的な情報処理が有効という特性を生かした支援をしたい。



サインカード

「できたよ」「わからないよ」「てつだって」などと書かれていて、自分で選択し提示することで担任に意思を伝えられるようにしました。

模型の時計

自分の示したい時間を担任や保護者に伝えました。

文字表記によるコミュニケーション

交換日記やメールで担任との意思交換をしました。

うなずきや首振り

イエス・ノーなどのジェスチャーで答えられるようにしました。

活動シート

活動内容が書かれたマグネットシートで、自分がすることを選び、予定黒板に張り付けるようにしました。徐々に、箱庭、ジムボール、アイロンビーズ、コラージュ、外で遊ぶ等、カードが増えていき、活動の幅が広がりました。



事例から学ぶ

保護者の困り感に寄り添い、自律学校・小学校各SRECが連携しながら子どものよりよい成長を求めて、支援のネットワークをつくっていく大切さが分かります。

子どもの特性に合わせた適切で具体的な支援を行うことで、子どもは安心して学校生活を送ることができるようになります。

「個別の指導計画」を作成し確かな支援を(小学校)

～原学級担任が「個別の指導計画」を作成して～

自律学級に在籍する4年生のマサオさんは高機能自閉症の男の子です。興味を持ったことにはとことんのめり込むけれど、関心のないことは全く眼中にありません。技能教科のほかにも理科や社会科も原学級で学習していますが、一斉指導の授業では集中できないことが多く、今何をしているのかが分からなかったり、また不器用さが強く操作活動が苦手だったりして、学習がなかなか身に付いてきません。そんなマサオさんに対して、原学級担任は「個別の指導計画」を用意して、よりよく楽しく学ぶためのマサオさんへの支援を考えました。



マサオさん困ってるよな。でも何に困っているのだろう。

どうやれば話していることが分かるんだろう。

「やったー」という顔を見たいなあ。

この時間は何を学ぶことができるだろう。自律学級ではどんなふうになっているだろう。



原学級の授業でも、その時間にやるのが分かっていたらよいのだけれど…。

記憶を助けるものを用意できるといいな。

特別扱いはイヤがるから、他の子にも通じる支援がいいな。



●マサオさんの「個別の指導計画(通常の学級用)」を用意して、指導への見通しをもちました

自律学級で作成している「個別の指導計画」を参考に、原学級担任も自分の教室用のマサオさんの「個別の指導計画」を作成しました。その中で次のことを明らかにしました。

- ① 原学級の学習で願うこと
- ② 教科のねらい
- ③ 本児の予想されるつまずき
- ④ 支援の方法
- ⑤ 自律学級での支援の位置づけ方

を明らかにして指導に当たりました。



【原学級担任の願い】

- 教室での学習を、実りのあるものに…。
- 支援の見通しをもつために…。

◆マサオさんの「個別の指導計画」(抜粋)◆

原学級での児童の実態		—略—	諸検査の結果	—略—
今年度の目標	1. 筋力を維持することができる。 2. 活動の区切りで「これでよいか」を担当とともに確認したり、次に何をするかを確認したりする。 3. 友だちの活動や言葉から自分のすることを知り、一緒に活動できることを増やす。			
1学期の目標	学習内容・手だて		評価	
○範囲を決めて作業に取りかかることができる。 ○写真を見ながら内容を理解することができる。	○「ここまで」と範囲を確認し、はじめは一緒に作業する。 ○矢印を使って写真をたどったり、ペープサートと吹き出しを使ったりする。 ○隣の友だちの作業を見たり声がけをしてもらったりして、学習の内容を知る。			

●原学級での授業に何を願い,どんな支援をするかを考えました



原学級で学習するよさ

- ① マサオさんには集団は大きい方がよい。
その中でこそ学べる人間関係もある。
- ② 通常の学級の授業に参加できることが自信につながる。
- ③ 教科のねらいが身に付く。

自律学級で支援

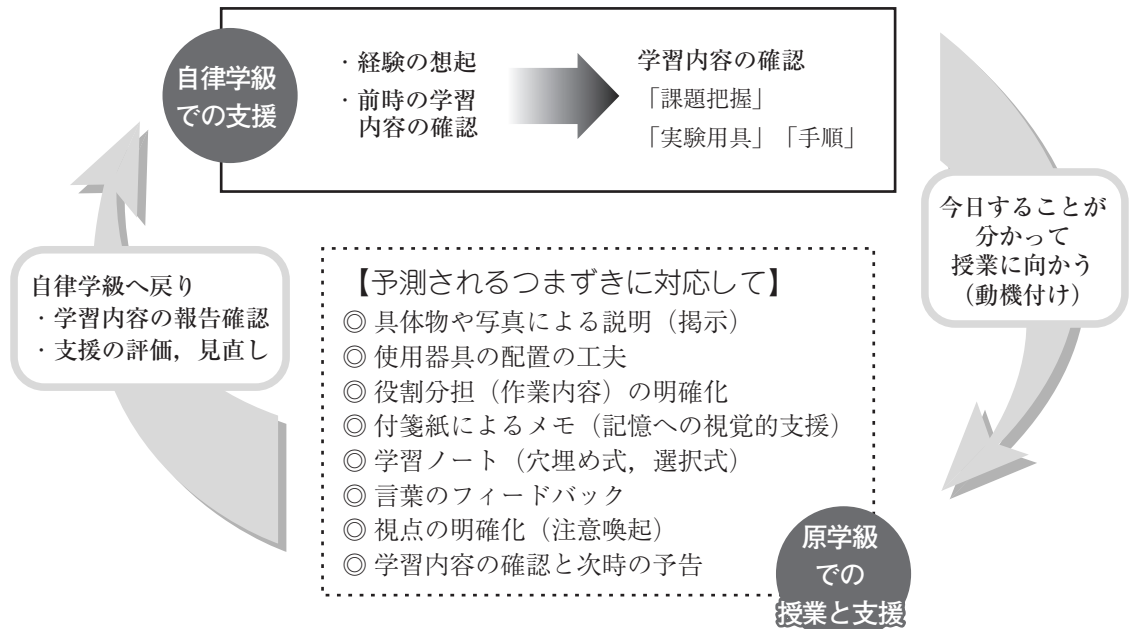
- ① 身体知覚と運動企画力を育てること。
- ② ボディイメージの向上をはかること。
- ③ スケジュールを確認すること。
・ 活動内容の報告確認
・ 次時の活動内容の確認

支援の原則

- ① 学習内容を確認し見通しがもてるようにする。
- ② 情報の提示は順序よく行う。
- ③ 情報の提示には視覚的補助教材を用意する。
- ④ 授業中も視覚的補助教材を用意し,学習を支援する。
- ⑤ 具体的作業が安全にできるような配慮をする。



◆マサオさんへの支援の実際(理科の学習)◆



マサオさんの分かりやすさは, みんなの分かりやすさにもつながる

事例から学ぶ

原学級でも「個別の指導計画」を作成することで, 特性に応じた具体的な支援の方法や支援する場面などを明らかにすることができます。また, 原学級担任と自律学級担任のよりよい連携が, 校内における支援体制のモデルとなり, 他の学級にも広がるのが期待できます。

特性を知って、支える仲間づくり(中学校)

～みんながアキラさんのサポーター～

自閉症やアスペルガー症候群などの児童生徒が、所属する集団の中で生き生きと活動していくためには、教師や保護者といった大人の支えはもちろんですが、一緒に生活している子どもたちの理解やサポートが不可欠です。本事例は、中学校の部活動や学級といった集団の中で生き生きと活動することを願い、保護者と連携しながら周囲の子どもたちの理解を進め、サポートを呼びかけた取り組みです。

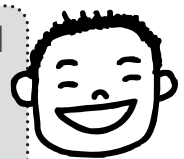
●アカネさんの悩みに応えることから始めてみました



アカネさん

吹奏楽部のアカネさんは、同じトランペットパートに所属するアキラさんの行動がどうしても理解できず、悩んでいました。

「アキラさんはみんなとちょっと違う感じ。時々、ビックリする行動がある」
 「よくボーッとしているけど、やる気あるのかな？」
 「先生はあまり注意しないけど、アキラさんだけ特別扱いなの？」
 「私たちはどうしたらいいの？一緒にやっていく自信がない！」



アキラさん

悩んでいるアカネさんにアキラさんのことを理解して接してもらうにはどうしたらよいか、部活動顧問も悩みました。SRECと話し合い、アキラさんのお母さんを交えて相談することにしました。

困って何とかしたいと訴えてきたアカネさんの気持ちをしっかり受け止めたい。



部活動顧問

アキラにとって周りからのサポートが不可欠。みんなにアキラのもっている特徴を話さなければいけない時がくるって思っていたけれど、今がその時なのかも。



アキラさんのお母さん

教師だけでなく、周りの子にもアキラさんのことを分かってもらうことが必要な時じゃないでしょうか。アキラさんが集中できる工夫も必要ですね。



SREC

アキラさんのことを一番理解しているお母さんから、アカネさんにアキラさんの抱えている困難点について話をしてもらうことにしました。

いつもアキラのことを気にかけてくれてありがとう。実はアキラはアスペルガー症候群という障害があるの。アキラが集団生活をしていくには、周りの友だちの支援が必要なの。



そうだったんだ。説明してもらって、初めて分かりました。もう少し詳しくアスペルガー症候群について知りたいです。私だけじゃなくて、部のみんなも話せば分かってくれると思います。

「先生たちが自分の気持ちをしっかり聞いて、対応してくれた」ということで、アカネさんのわだかまりが解け始めました。そして、アキラさんのお母さんから話を聞いたことで、アカネさんのアキラさんに対する見方が変わり、アキラさんを支えていこうという気持ちや、アスペルガー症候群についてもっと知りたいという気持ちを抱くようになりました。

●吹奏楽部の仲間をサポートを呼びかけました

吹奏楽部の仲間にもアキラさんのことを理解した上でサポートしてもらえよう、お母さんから話をしてもらおうことになりました。

アスペルガー症候群の特徴である場の雰囲気を読めない、言葉どおりに受け止める、こだわりがある、といったことがアキラにもあります。感覚が過敏で、特にいろいろな音が気になります。やる事が分かっていると安心してできますが、いつもと違うことがあると困ってしまいます。委員会や係など、自分の仕事にはこだわりを持ってしっかり取り組めるけれど、それが気になりすぎて他のことができなくなってしまうこともよくあります。決められたお手伝いなどはよくやってくれるんですよ。
<一般的なアスペルガー症候群の特徴とアキラさんの特性について話してくれました>



周りの皆さんにお願いします。初めてやることや急な変更のときは事前にどうしたらよいか話してあげて。ボーッとしているときや話を聞いてないときは、肩をポンと叩いて声をかけてあげてください。落ち込んでいるときは、そっとしておいてください。そして、アキラのことを理解してもらって、みなさんがアキラのサポーターになって下さい。

アキラみたいな障害のある子のことをわかりやすく紹介した本があるの。読んでみて。

- ・落ち込んだりパニックになったりしているときは、そっとしておいた方がいいんだ。(アカネさん)
- ・お母さんが紹介してくれた本を読んだら、その理由がよく分かったわ。変だなあとと思うことばかり気にしていたけど、アキラさんのよいところもたくさんあるよね。(パートメンバー)
- ・いろいろとうるさく注意するより、さりげなくサポートする方がいいのね。(パートメンバー)
- ・全体に指示を出すときは、アキラさんに一声かけてからにするように心がけてみます。(部長)

お母さんが、自閉症やアスペルガー症候群の理解のための本を紹介してくれました。

「あなたがあなたであるために」(吉田友子著、ローナ・ウィング監修、中央法規) 本人への告知を考える人、アスペルガー症候群の人自身の自己理解に参考になります。

「十人十色のカエルの子」

(落合みどり著、東京書籍)

発達障害全般(学習障害・自閉症・アスペルガー症候群・ADHD等)について語られています。家族、教師、そして自閉症やアスペルガー症候群の子ども自身のために分かりやすい絵で具体的に描かれたガイドラインです。

「光とともに」

(戸部れいこ著、コミック、秋田書店)

自閉症児とその家族の悩みや喜び、周囲の支えや保育園、小学校での具体的な支援などがコミック版で分かりやすく描かれています。

アキラさんのお母さんからお話を聞いたり、紹介してもらった本を回覧したりすることで、吹奏楽部の友だちはこれまでのアキラさんの行動の理由が分かるようになりました。アキラさんへの対応の仕方についてもお母さんから具体的に話していただき、「吹奏楽部員が、まずアキラさんのサポーターになろう」という気持ちを持ってくれました。また、部活動顧問は、練習予定が確実に分かるようにアキラさん用のスケジュール表を用意し、それを見てアキラさんが安心して練習に取り組めるようになりました。

こうした取り組みをしたところ、部活動の中でのトラブルはほとんどなくなりました。アカネさんにも明るい表情が戻り、アキラさんも今まで以上に熱心に練習に取り組めるようになりました。

やる事が分かると安心できるな。前より部活動の時間が過ぎやすくなった気がする。



●クラスでアキラさんの特性について話し、サポートを呼びかけました

吹奏楽部で生き生きと活動しているアキラさんですが、クラスの中では居づらいときがあったり、アキラさんの言動に違和感をもっている生徒がいたりしました。そこで、学級担任とSRECで相談し、クラスでもアキラさんの特性について話し、みんなの支援を求めていること、保護者に提案しました。

クラスで困っているアキラさんの同級生は・・・

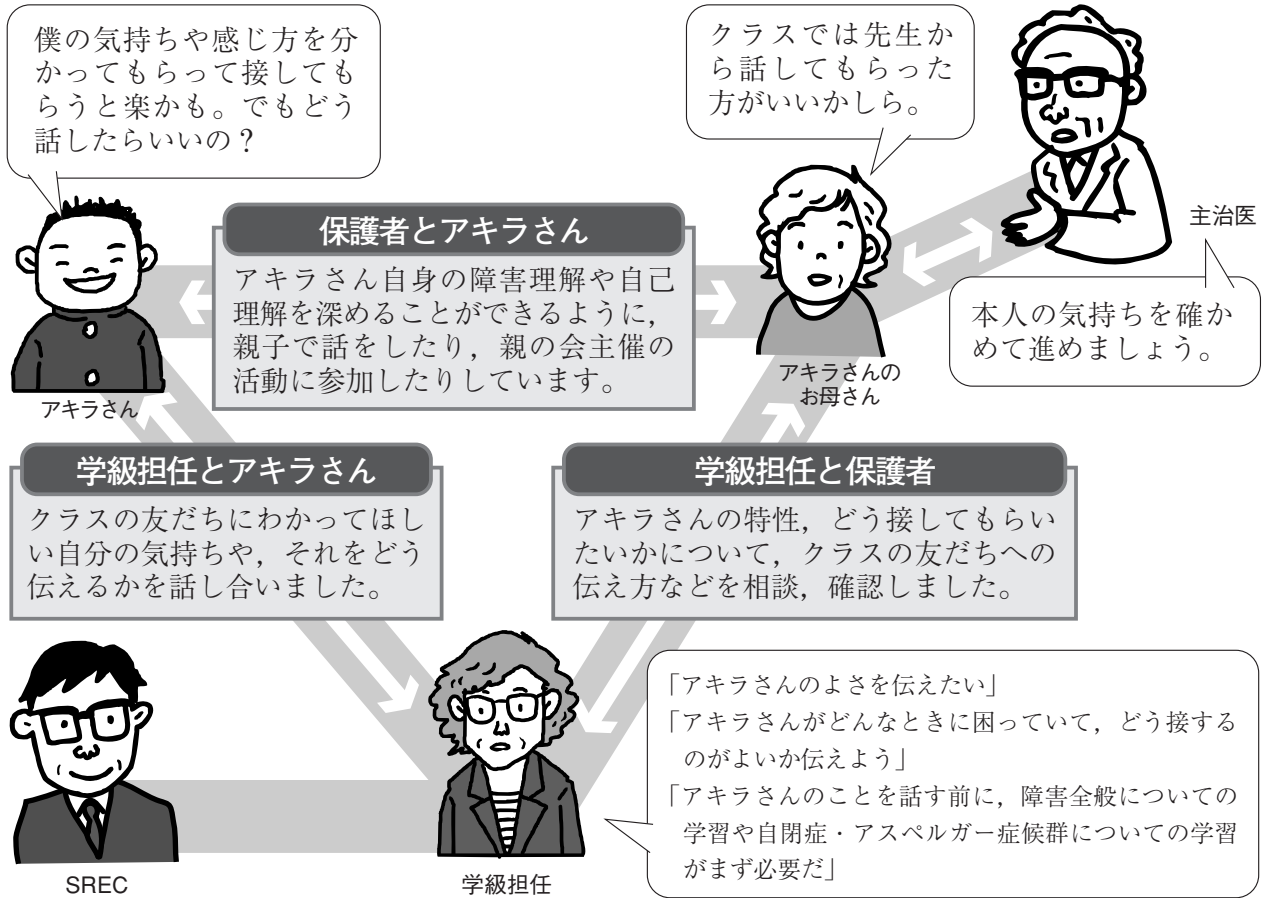
「もう少し静かなクラスだといいなあ」
「冗談でからかってくるのが許せない」
「バレーボールの練習でアドバイスしてくれたんだけど怒られたように感じて悲しくなっちゃう」



「話しかけても返事をしてくれないことがある」
「急にいなくなっちゃうことがあるのはどうして？」
「音楽や社会は得意なんだな」



●クラスへの伝え方について、担任・保護者・アキラさんで相談しました



主治医の先生にも進め方を相談したところ、「本人の気持ちを大切にしながら進めましょう」というアドバイスがありました。アキラさんと保護者、アキラさんと学級担任それぞれで、アキラさん自身の特性の理解を深める話し合いを重ね、その間に学級担任とSRECでクラスでの授業の進め方を考え、保護者とも相談しました。その結果、まず、障害全般についての理解を深める授業、次に自閉症やアスペルガー症候群の特性や対応のポイントについての授業、そしてアキラさんについての理解という順で進めていくことにしました。

●クラスで障害理解の授業を展開しました

「『自閉症』って知ってるかな？間違ったイメージを持っている人も多いから勉強しよう。ビデオや本、コミックなどで紹介したものもあるよ」

「自閉症の人も生活しやすくなるためにはどうしたらいいかな？」



学級担任

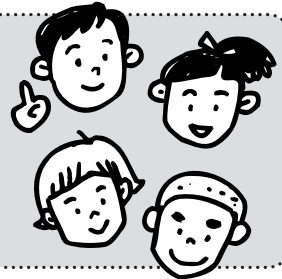
いろんな人たちの「違い」を理解し、認めていかれるようなクラスになってほしいんだ。

「『障害』という言葉から何をイメージしますか？」

「『ノーマライゼーション』の実現のため、私たちは何ができるかな？」

同級生の意見

- ・環境や周りの人の意識が変わることで、障害のある人がもっと生活しやすくなるんだなあ。
- ・障害の原因は何なの？自閉症って治らないの？もっと障害のこと、自閉症のこと、アスペルガー症候群のことを知りたいなあ。
- ・『自閉症』って、暗くて自分の殻に閉じこもっている人ってイメージだったけれど、間違っていたわ。感覚が過敏ってことや、こだわりが長所になることもあるって初めて知りました。
- ・その人の特徴を知った上で、お付き合いしていくことが大切だと思いました。

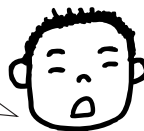


『障害』と聞いても漠然としたイメージしか持っていない子どもや誤解をしている子どももいました。学級担任とSRECは、自閉症児を紹介した本やテレビ番組のビデオも利用しながら、具体的な姿で自閉症やアスペルガー症候群を理解できるようにしました。授業を通して出てきた新しい疑問などにも丁寧に答えていきました。

●クラスでアキラさんの気持ちや特性について伝え、サポートを呼びかけました

学級担任が「一人一人それぞれいろいろな特性をもっている。それを尊重できるクラスにしたい」という願いを話した後、アキラさん自身から、普段困っていることや、そのときの自分の気持ちをみんなに伝えてもらいました。学級担任は、アキラさんのお母さんが吹奏楽部で話してくれたことをベースに、アキラさんの特性や保護者の思いを伝え、クラスとしてアキラさんをどうやってサポートしていくことができるのかを話し合いました。

「いろいろな音が気になって頭が痛くなるんだ」「冗談が許せないことがあるんだ」「うまくいかないことやトラブルがあると、どうしたらいいか分からなくなっちゃう」「一人で落ち着く場所がほしいことがあるんだ」



みんながアキラさんのサポーターになろう！

友だちの声

「他人事のような気持ちでアスペルガー症候群の勉強をしていたけれど、アキラさんの話を聞いてビックリ。でも自分のできることで協力したい」「感覚が過敏って大変そうだな。雑音を減らしたいけれどできるかなあ」「今まで軽い気持ちでからかってごめんなさい」「おかしいな、わがままかなって思う行動にも理由があったんだ」「アキラさんはアキラさん、一人の友だちとしてつきあいたい」

実際に同級生の中にアスペルガー症候群の人がいるということにビックリしたクラスメートでしたが、アキラさん本人から困っていることを聞いたり、保護者の思いやアキラさんへのサポートの具体例を聞いたりしたことで、「できることで力になろう」という気持ちに変わりました。

自分のことを話した後のアキラさんは、苦手だった体育に友だちと一緒に参加できるようになったり、修学旅行を楽しみに事前学習や係活動に取り組んだり、クラスでの活動に積極的に参加しています。

事例から学ぶ

「社会で生活していく上で、周りからの支援が不可欠」という思いを持っている保護者と連携し、周囲への理解を深める取り組みを進めることができました。教室や部活動での友だち、担任、教科担任、部活動顧問…より多くの周囲の人たちがサポーターとなることで、自閉症やアスペルガー症候群の子どもも集団の中で生き生きと活動できるようになります。

情報交換と記録の積み重ねで一貫した指導を行う

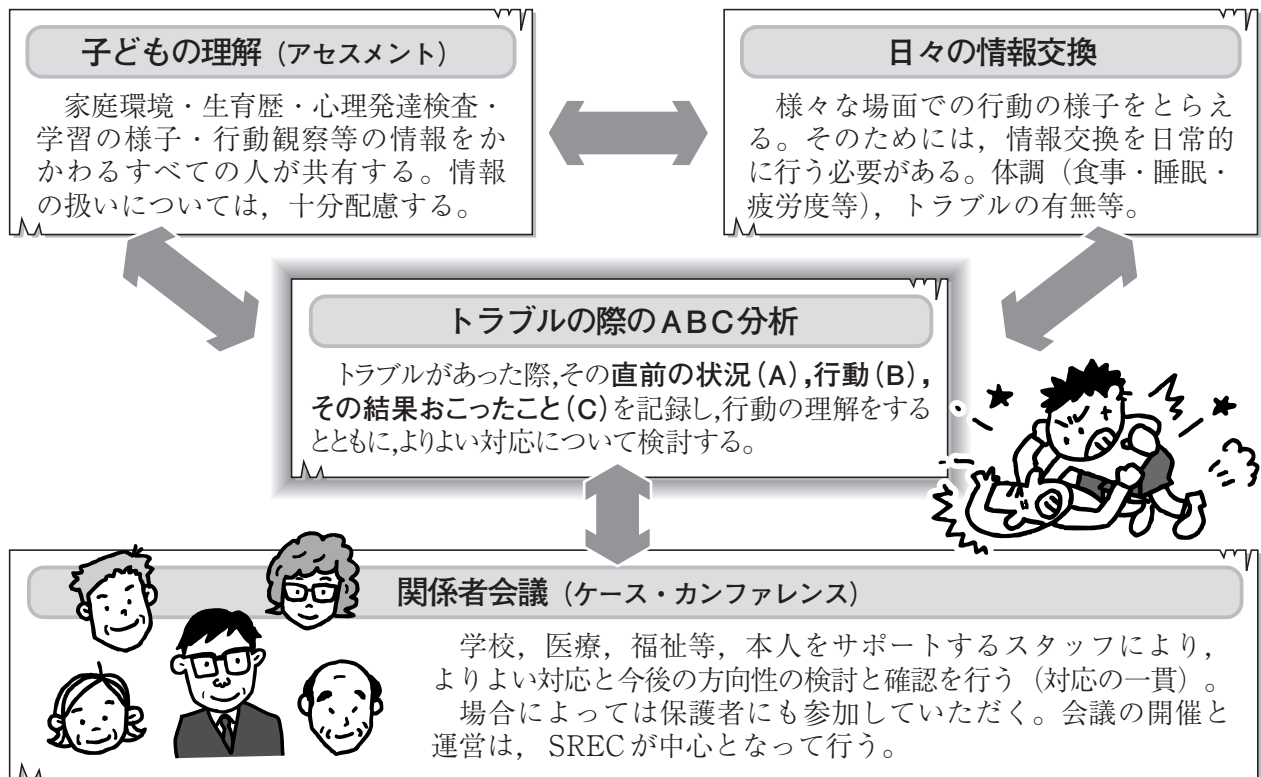
～ABC分析により環境条件を整える!～



子どもたちの問題行動を理解し支援する際、その行動によってその子が環境とどのような相互作用をしているかを調べ、そのかわり方に関係している様々な要因を探し出し、それらの要因のいくつかを変えることによってかわり方を良い方向に変えようとする方法があります。これをABC分析とか機能分析といいます。

教師集団が、日々情報交換を積み重ね行動の分析をすることによって、一人一人の理解を深め、問題を起こさなくてもすむ環境づくりを進めることができます。

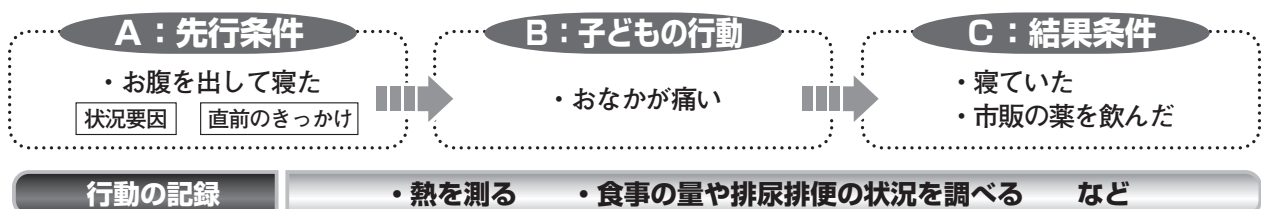
●ABC分析の活用



●行動の記録とABC分析

その子の行動を正確に知るためには、まず記録が必要です。現在の状況について、できるだけ正確に情報を得ます。そして、その前に起こった状況について知る事、その後の対応について知ることが必要です。また、記録は具体的で誰が見ても同じである必要があります。

記録に基づいて仮説を立て、それらに対応する手立てについて考えます。記録はそれらの手立ての効果をはかる物差しにもなります。また記録はその子が間違っただけの指導を受けないための権利でもあります。そして、仮説を立てるために、行動の前後のできごとを考えます。どんな行動も、環境と無関係に生じるものではありません。



A：先行条件

＝行動の手がかりやきっかけ

状況要因とは？…疲労、睡眠不足、といった時間的・空間的に隔たった要因です。直前のきっかけとは？…その刺激があるために行動が起こりやすくなるものです。

B：子どもの行動**C：結果条件**

＝行動の後の対応や結果

結果条件とは？…行動をおこす事で得られたものや消失したもので、行動を維持していると考えられるものです。

ABCを明確にして子どもの理解を進め、かかわり方について見直しをはかります。同じ行動でも、状況によっていろいろな意味があるということが分かってきます。

意味＝機能：感覚刺激、回避、注目、要求・事物の獲得

行動の前の手がかりや行動の後の対応は言葉だけではなく、周りの状況の変化であることもあります。行動の前後の対応を変えることによって、行動は変えることができます。また行動の前の要因に目を向けて、それらが行動に影響を与えていることがはっきりと分かれば、それらの状況事象をよりよい方向に変えておくことも必要となります。

●問題行動に対する援助の具体**1 結果条件に注目する****強化＝問題行動以外の適切な行動に対しその行動が増えるよう、褒め認める。**

例：褒め言葉…よい行動が見られたらささいなことでも褒める。その際は具体的な行動を褒めるようにする。本人にとってわかりやすい言葉で。時にはタッチングを添えて。褒めることを習慣化する。

例：トークン(ご褒美)…目標が達成できたらご褒美を与える。クラスでトークンエコノミー活動として目標を決め、目標数に達したらクラスでのお楽しみ活動を行う等も有効。

消去＝問題行動が生じてもそれに対してはいっさいの対応をせず見守り、それ以外の適切な行動に対して注目したり褒めたりする。(肯定的無視)

例：逸脱行動の機能が「注目ひき」であると判断した時は、相手をしない。側を離れる。声をかけない。

代替行動＝問題行動以外の適切な行動を示し、それを行ったら褒める。

例：外で砂遊びをするかわりに教室で工作をする等、してほしい行動(学習)に参加できない時は、それに替わる活動を自分で決めるようにする。決められない時は選択肢を示す。

過剰修正＝おこした問題行動に関連した、努力を要するよい行動ができるようにする。

例：泥を投げてガラスを汚したら窓ふきをする。いたずら書きをしたら自分できれいに消す。一人ではできない時は、教師も一緒にやる。

タイムアウト＝問題行動をおこした場から離す事で、本人にとって望ましい状況(例えば友だちと遊ぶ)を妨げる。**2 先行条件に注目する**

問題行動を生じさせるようなきっかけを可能な限り提示しない。

例：行事等の際は事前に内容を説明し、不安を取り除く。下見の際などに写真を撮り、事前学習の際視覚情報を与える。自ら行動をしなければいけない場面ではリハーサルを入念に行う。常に人間関係を把握し、座席について配慮する。

3 状況要因に注目する

生理的要因(体の不調、薬効、空腹、疲労等)・物理的環境要因(騒音・高温・部屋の狭さ・気になる物品の存在等)・人的環境要因(好きな人・嫌いな人の存在、先生に叱責されるといったような人とのかかわり方、楽しみな活動が用意されている、嫌な活動がある等)の可能な範囲で調整(適切な行動が生じやすい状況作り)する。

大切なのは情報の共有と一貫した対応です。記録をもとに、その子の問題行動について共通理解し、様々な場面でかかわる大人が一貫した対応を行うことで、環境の変化に敏感に反応する子どもたちにできるだけ安定した環境を提供することができます。